生きた風景を育む

Nurture the landscape to be alive

野村　はな　*Hana NOMURA*

株式会社ヘッズ大阪本社
HEADS Co., Ltd.

はじめに

幼い頃，「桜の山」という認識で親しんだ場所が，噴水や広場のある新しい公園に整備されたことが，私がランドスケープの道を志すきっかけになった。思い出の場所を失ったようで寂しくもあったが，その公園で遊ぶようになるとまた新たな愛着を持つようになり，場所や風景にかかわる仕事についての興味が芽生えた。

つくる時代からマネジメントの時代へと言われる変化の中でランドスケープの仕事に就き 16 年が経つ。まだ道半ばだが，様々な協働の機会に恵まれ，地域の自然やそこに暮らす人々とのコミュニケーションの中から，その場所らしい風景を描くことに，計画・設計・マネジメントの実務を通じて挑戦してきた。「風景を育む」という視点から，そのいくつかのプロジェクトを紹介し，これからについて考える機会にしたい。

暦のある風景

けいはんな記念公園（京都府立関西文化学術研究都市記念公園）は，けいはんな学研都市の建設を記念して計画・建設された公園である。2006 年 6 月に指定管理者制度が導入され，その 1 期目は植彌加藤造園株式会社と弊社の共同体が指定管理業務を受託し，当時入社 2 年目の私は景観演出・企画運営の担当者として 2 年半の出向の機会を得た。

まず，開園から約 10 年が経過した当時の状況を，計画時の「日本の文化や風土を表現する」というコンセプトと照合して新たな目標像を描き，それに向けた管理を段階的に進めた。例えば，ダイナミックに構成された空間に様々な景が配された日本庭園の一部に，「里」の象徴として設けられた段々畑は，当時園芸品種の花壇となっていた。私たちは，地域の農家の協力を得て稲作が可能な土や水の環境を創出し，そこでの農作業を親子向けの年間プログラムとして企画・運営して継続可能な仕組みを構築し，人と自然が共生する「里の営み」を棚田風景として現すことに取り組んだ。このように，その場所の目標像に向けた育成管理を園内各所で展開し発信した。当時私は少しずつ変化していく風景に魅了され，日々の仕事に没頭していたが，計画的・創造的な日々の手入れと，地域との協働による「営み」の継続により，公園に瑞々しく「暦」が育まれ，関わった人，訪れる人に共有され，じわじわと地域に浸透していくのを実感できたことが大きな収穫だった。私自身の中にも今も拠り所にしている「暦」が形成された。

日常の風景

2009 年，同業他社の友人に誘われて「街区公園お調べプロジェクト」に参加した。大阪市中央区にある複数の街区公園を，実測調査やアクティビティ調査によって観察し，アクティビティと空間の関係性を読み解き，得られた気づきを実務にフィードバックすることを目的とした。街区公園には，住宅・オフィス・商業施設などが混在する中央区の日常が滲み出していた。仕事の合間の一服，知人との立ち話，漫才やファッションショーの練習，地域宴会など，人々が公園にそれぞれの居場所を見出だし，思い思いに過ごしている様子が印象的だった。その様子は周辺環境を反映して公園毎に異なり，まちの個性が現れていた。

その後，実務で街区公園のリニューアル設計に携った。堺市三国ヶ丘公園では，隣接する幼稚園へのヒアリングや，乳幼児親子，幼児，送迎をする保護者，小学生，中高生，大人といった利用者層別・時間帯別のアクティビティ調査を基に方針を検討した。また，既存樹木を生かし，中低木を撤去して見通しのよい樹下空間へと導き，その下に多様な居場所を組み込み，地域のシンボルでもある緑と日常の利用をより快適に融合させることを試みた。

写真－1　生き生きとしたアクティビティが個々で成立しながらも共存し，時間帯によって移ろう。2018 年 5 月撮影

まちに広がる風景

2018 年にリニューアルした芦屋市宮塚公園は，市の中心部，街路樹の下にお洒落な飲食店などが点在する通りに囲まれたエリアに位置するが，リニューアル前は街路からの見通しが悪く，安全面の課題も抱えていた。芦屋市は，整備規模としては小さなリニューアル事業を，市の「公園整備・利活用活性化方針」検討のモデルとして位置づけ，私たちは実務者として，行政・学識との協働によりこのプロジェクトに取り組んだ。まずは自治会，子育て世代，カフェ事業者など多様な主体をメンバーとした「意見交換会」を立ち上げ，利用者目線のニーズやアイディアを空間のボキャブラリーに変換して再構築する「公園のリ・デザイン」と，立場や活動の異なる人々の個々の意見を地域活性化という共通の目的に置き換える「パートナーシップ形成」を同時進行させて，１つのプランとして合意形成を果たした。地域主体で企画したオープニングイベントでは，それぞれの過ごし方や満足の仕方が融合した，新しい風景が生まれ，共有された。

公園の可能性を発見したメンバーを中心に，現在は「宮塚公園ジブンゴト協議会」という持続的にプログラムを生み出すプラットホームに発展している。リニューアル後，夕方になると宿題とスケートボードを持って集まる小学生の姿や，周辺店舗でテイクアウトしたパンやコーヒーを楽しむ若い人の姿など，公園が地域の庭のように，思い思いに使われる風景が定着した。互いの存在を感じながら，心地よい距離感で過ごすことができる公園には，コロナ禍にも変わらない心地よい風景があり，その風景がまちの魅力を発信している。

写真－２　緑の中で人が思い思いに過ごす風景が，まちの魅力を育んでいる。2018 年５月撮影

共に生きる風景

現在，愛媛県西予市野村地区の復興まちづくりとしての公園・広場の設計に携わっている。平成 30 年７月豪雨災害からの復興を図るため，平成 31 年３月に住民主体でまとめられた「のむら復興まちづくり計画」の中には，ひとつの目標像として「肱川と共に生きる」という言葉が書かれ，被災した河川沿いの空間は，復興のシンボル，そしてこれからのまちを象徴する広場や公園として計画されている。

ビジョンづくりから始まり継続して開催されているワークショップはすでに 15 回を数え，現在は整備後の利活用や管理運営を具体的に想定した意見交換が行われている。また，整備予定の被災地の一部では地元の高校生・地域・大学が協働して菜園の試行が行われている。空間として現れるのはまだ数年先だが，住民自らが地域の自然と共に生きる未来の風景の姿を描く中で，近代化の中で希薄になっていた川と暮らしとの関係性が再び育まれ始めていると感じる。将来的に連続した河川沿いの共有空間が整備されれば，災害に対するレジリエンスや生物多様性の向上にも寄与するであろうし，中学生から高齢者までが対等に意見を交わす中で生まれた熱のある提案や試行活動が実を結び，「川と共に生きる風景」として共有されることで，地域への愛着もより一層育まれるだろう。

私たちは野村地区の人々の想いや試行活動の結果を空間に反映させながら，実施設計に取り組んでいる。

写真－３　被災した肱川沿いの空間。 2021 年 10 月撮影（左）
写真－４　模型を見ながら議論する様子。 2021 年 11 月撮影（右）

おわりに：生きた風景

ランドスケープの仕事は，具体的な「場」を通じて地域のこれからの風景を共に考え，かたちや仕組みをつくることで，人・まち・自然の様々な関わりや，きっかけとなる状況をつくることであり，ひとりひとりの価値観が重視されるこれからの社会でより大きな役割が求められるだろう。

風景は，植物の成長，自然災害，人の活動など様々な要因の中で絶えず変化する。「生きた風景」とは，変化する風景に人々が想いを寄せて生きることで，地域の風土や暮らしぶりが滲み出している様だと考える。この先の風景をつくっていくのは，今生活するひとりひとりであり自分自身でもあるという矜持を持って目の前の仕事に丁寧に向き合い，生きた風景を育むことに挑戦していきたい。

（略歴）
鹿児島県阿久根市出身。九州芸術工科大学環境設計学科卒業後，2005 年に株式会社ヘッズ入社，現在に至る。ＲＬＡ。